



[考察]

規則の適用回数が変わる別解について考察する．排中律による場合分けのために，上記の証明では  $\exists z \neg P(z) \vee \neg \exists z \neg P(z)$  という論理式を使ったが，代わりに， $\forall x P(x) \vee \neg \forall x P(x)$  なども使える．ただし，代わりの論理式を使うと，ド・モルガンの法則による式変形に相当する追加の部分証明が必要になり，規則の適用回数が増えてしまう．

自然演繹において，背理法  $\perp_c$  を使う証明は常に排中律 EM を使う場合分けの証明に変換でき，逆に，排中律 EM を使う場合分けの証明は常に背理法  $\perp_c$  を使う証明に変換できる．任意の論理式  $A, B$  について，以下の変換ができる．

$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{c} i \\ \neg A \\ \vdots \\ \perp \\ A \end{array} \perp_c & \begin{array}{c} \text{展開} \\ \text{単純化} \end{array} & \frac{\frac{\overline{A \vee \neg A}}{A} \text{ EM} \quad \begin{array}{c} j \\ A \\ \vdots \\ \perp \\ A \end{array} \perp}{\perp} \text{ VE } j, i
 \end{array}$$
  

$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{c} j \\ A \\ \vdots \\ B \end{array} \frac{\begin{array}{c} i \\ \neg B \\ \vdots \\ \perp \\ \neg A \end{array} \Rightarrow E}{\perp} \Rightarrow I \quad j & \begin{array}{c} \text{単純化} \\ \text{展開} \end{array} & \frac{\frac{\overline{A \vee \neg A}}{B} \text{ EM} \quad \begin{array}{c} j \\ A \\ \vdots \\ B \end{array} \quad \begin{array}{c} k \\ \neg A \\ \vdots \\ B \end{array}}{\perp} \text{ VE } j, k
 \end{array}$$

第 1 の相互変換では，背理法  $\perp_c$  を使う方が排中律 EM を使うよりも規則の適用回数が 2 回少なく，第 2 の相互変換では 2 回多い．

解答の証明では，背理法を 1 回，排中律を 1 回，その他の規則を 11 回使った．解答での排中律による場合分けの証明は，第 1 の相互変換の右側の形に合わないため，背理法を使う左側の形へと単純化して規則の適用回数を減らすことはできない．また，解答での排中律による場合分けの証明を，第 2 の相互変換により背理法を使う使う左側の形へと展開できるが，規則の適用回数が増えてしまうため，解答では背理法でなく排中律を採用した．

山田 俊行

<https://www.cs.info.mie-u.ac.jp/~toshi/>